
エルバイラ物語

kikijiki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エルバイラ物語

【Nコード】

N2681T

【作者名】

k i k i j i k i

【あらすじ】

よくある異世界ものファンタジー

オリジナリティーがなくてすみません

作者にエサを与えないでください、調子に乗ります

異世界へ

全く訳が分からない…。

俺、こと中佐都^{ナカサト} 奈織樹^{ナオキ}は混乱していた。

俺はさつきまで学校に居た筈だ。まだ校舎から出てもない、事実俺が履いているのは学校指定の上履きになっているシューズだ。

しかし…おかしい何がおかしいのかわからないくらいおかしい出来事が今目の前で起こっている。何故俺はこんな鬱蒼とした森の中にいるんだ？

「おい、聞こえねえのかガキ、おかしい恰好しやがって、金目の物が食えるものを出せって言ったんだよ。」

そして何故、俺はこんなマンガやファンタジー小説の中でしかあり得ないような、記号のような『悪人』の容姿をした奴に、これまた日本じゃなかなかお目にかかれないような両刃の西洋剣を突き付けられているのだろうか…。ホントになんだこれ、演劇部の部室にでも迷い込んだのか？最近の演劇部は手が込んでいるな…。

「何とか言えやガキ！」

男が突き付けていた剣を横に払うと、俺の右頬を掠める。

「痛つて…！」

確かな痛みの上に、頬を伝う生暖かい感触、切られたらしい、どうやら作り物や模造刀ではなさそうだ…頬を伝う血液の感触が、嫌が応にもその事実を俺に押し付けてきた。理解した瞬間恐怖で声が出なくなる、逃げなくては、頭ではそう感じてても、手足は思った通りに動かない。体中の血の流れが逆流したような寒気に、俺は歯を鳴らして震える。

死。

普段は考えても答えの出ない生物の結末…その答えが今では鼻先まで来ているような気がした。

今のうちに覚悟しなくては、覚悟する間もなく結果は訪れてしま

いそうな、一触即発の緊張感、俺はその緊張感に耐え兼ね、直立することすらできなくなり、その場にへたり込む。

「チツ、面倒くせえな、厄介な奴が来る前に、コイツをどうするか…。」

気づかなかつたが、男は一人ではなかった。他にも四、五人ほど、男の仲間であろう、屈強な体つきの、しかし同じように柄の良くない男が俺を取り囲むように立っていた。

「頭あ、街の方じゃ、内臓の売買が流行ってるようだが、特に若い健康な中身なら高値で買い取ってくれるらしい。」

「ほう、いい話を知ってるじゃねえか、丁度いい金に困ってた所だ、俺たちも追剥みてえな前時代的なことよりも、そうした『ビジネス』に手を出してみるのも悪かねえなあ…ちいとばかりは値は落ちるだろうが、コイツを始末して運びやすくしてから街にでも持っていくか。」

頭と呼ばれた悪役男が剣をのど元に突き付けてくる、どうやら俺は自分が置かれている状況も碌にわからないままここで肉の塊として売り買いされるらしい…ここまで来ると妙に腹が定まって冷静になる、俺は何処でどう間違えたんだ？

(思い出せ！俺は何処で間違った？)

死ぬ前に、選択肢を誤った場所が何処だったか、俺は今日のことを振り返ってみた…。

よくあるお伽噺のようだ。異世界から来た少年がいろいろな苦難を乗り越えお姫様を助ける。そして二人は結婚して幸せに暮らし、ハッピーエンド。

だがそれは本当にハッピーエンドなのだろうか。少年は結局元の世界に戻らなくていいのか、育ててくれた両親や信頼している親友を置いて神隠しのように消え、それらの生活を投げ捨て別の世界の住人になる、そんなことが本当に出来るのか…多分俺には無理だ。

午後の授業中、窓から射してくる日の光を訝しみながら、俺は授業のことなどそっちのけで、えらく非生産的な、厨二病のような思考を巡らせていた。

この手の疑問を、今までの歴史上で一体何人が持ってきたことだろう、多分俺程度の人間が何年、何十年考えても、きつと答えなんて出やしないだろう。前者にしても、後者にしても。

だからいつもそこで考えるのをやめる、悪く言えば思考停止なんだろうけど、答えの出ないことを考えても仕方ない、時間の無駄だ。そうして、俺は人間の三大欲求の中でもとりわけ健康的な睡眠欲に対して理性を働かせるのを止める、そうすることで俺はいつも思考から逃げてきた。

寝てしまえば、考えなくて済む、時間はいつの間にか過ぎる。人によつてはこつちのほうが時間の無駄だと言うのかもしれない、だけど俺には睡眠以外に今現在、有効な時間の使い方が思いつかない、理解できない授業を聞くよりも、答えの出ない自己問答を続けるよりも、ずっと有意義だといえる気がする。

俺が目を覚ましたのは、下校時刻のチャイムが鳴った時だった。

「やべえ、寝過ぎした。」

さすがに今日は寝過ぎてしまったかもしれない、移動教室が無いのをいいことに、ずっと机に突っ伏したままだった。

時刻は午後四時、多くの生徒は部活に行くか下校しているかのどちらかで、ほかの教室からの声はまだ聞こえるものの、この教室に残っているのは俺だけのようだった。

まだ覚醒していない頭を何度か振り、口のまわりに付いた唾液を拭いてから、俺は立ち上がる。やはりまだ少し眠いらしい、足元がフワフワしている。仕方がないのでトイレかどこかで顔でも洗ってから帰ろうかと教室を出た時だった。

「中佐都、今帰るか」

友人の大野が声をかけてくる、大野は剣道部で、装いも道着に袴と、剣道のそれだったので、部活中だったんだらうと推測すること

ができた。

「部活、途中で抜け出してきたのか。」

「ああ、ちよつと忘れ物をしちまってな、それにしてもお前よく寝てたな。」

「そう思うなら、もっと早くに起こしに来てくれ。」

俺が不満を口にしても大野は「ほつといてもちやんと最終下校時刻までには起きるじゃん」といつものことだと言わんばかりに受け流される、まあこいつのこういうベタベタしないところも嫌いではないのだが。

「そういえば来月団体戦があるんだ、近いうちに先生から直で話があると思うけどまた助っ人を頼むことになりそうだよ。」

「おおマジか、久しぶりに剣道することになりそうだな…。」

俺は剣道部の正式なメンバーではないが、一応剣道部の所属である。わが校の剣道部は、二年生が二人、一年生が大野を含めて二人計四人なのだが、団体戦は基本五人で、一応多くの団体戦は三人から出場できるようにはなっている、しかし五対三では、二戦は自動的に不戦敗、その上一つの取りこぼしもできないので、かなり不利になる。もちろん四人でも一不戦敗は確定なので不利なものには変わりなく、足りない人数を補うべく、小中学校と剣道経験のある俺に白羽の矢が立ったのであった。この高校の剣道部の顧問には、中学の時からお世話になっていいる部分もあるので俺も断りきれず、結局団体戦がある度に、一週間程度前からお呼びがかかり、多少練習に出てから試合に臨む…という形で剣道部の助っ人をしていいる。剣道部に所属しているのは、部に所属していない者は出られない試合が多いからだ。俺はこれでも多少腕には自信があった。事実、わが校の剣道部で俺相手にまともに打ち合えるのは大野くらいだった。

「腕は鈍ってないよな？」

大野はしかめっ面で質問してくる、もうこれも何度目か、お決まりのやり取りである。

だから俺もお決まりのセリフで返してやる。

「先輩達は俺に勝てるようになったか？」

「わかんないよ、とりあえず練習に出てくればいいんじゃないかな？」

「ま、そのうちな。」

大野に背を向け、手を挙げてその場を後にする。

俺の教室はトイレまでが結構遠い。三階の一番端で、トイレは逆の端、校舎の反対側だ。そこまでは同じ学年の別のクラスや、特別教室等が並んでいる、俺は雑談をしている他クラスの女子や、机を取り囲んでニヤニヤしている男子を横目にトイレの方へ向かう。一学年のクラスを通り過ぎるとそこからは、第一音楽室、第二音楽室、家庭科室、美術室、そして突き当りには視聴覚室、美術室を廊下を挟んで反対側には屋上、二階への階段があり、トイレは階段の手前にあつた。つまり家庭科室の前である。

俺はその面倒くさい道のりを特に何かを考えたりするでもなく、ダラダラと歩く。

この学校のトイレは数年前に改装されたらしく、結構小奇麗だった、それでも個室のドアなどには、誰が書いたともわからない、思春期特有の上品なラクガキ（お日様のマークを縦に割ったようなアレ）があり、いかにもそれらしかった。

特に用を足すわけでもなかった俺は、手洗い場で顔を洗い、鏡で前髪を確認してからトイレを後にした。

トイレを出たところで、ふと、気になった。

斜向かいの美術室の明かりが見えた、それだけならいつもなら気にも留めなかっただろう、しかし気にしない訳にはいかなかった。なぜならドアの擦りガラスから漏れる光の色が、真っ赤だったからだ。

（気味がわりいな……。）

事なかれ主義ないつもの俺ならそう思ってスルーしていたことだ

ろう、しかしこの日の俺は何をトチ狂ったのか、その光がなんなのか妙に気になってしまった。

(…覗くだけなら。)

変な下心が湧いてしまった俺は、美術室のドアに手を掛けていた。ガラ…。

ドアを開けた時の車輪とガラスが振動する特有の音と共に、美術室のドアがほんの5センチほどだけ開かれる。そこから俺は中の様子を伺った。

中に人影は無い、いつもなら美術部員が黙々と絵を描く、見ていられるだけならこれほど面白くないものはないというような、辛気臭い光景が広がっている筈なのだが…。

光源は、正面黒板の方向のようだったが、教室後方のドアから覗いていた俺には、角度の関係でそれがなんなのかは見えなかった、しかし光は結構強いらしい、夕方の空が赤くなり、景色そのものが赤いこの時間帯でなお、その光は、同系色でありながら異彩を放つほどに真っ赤で美術室全体を染め上げていたからだ。

俺は誰もいないことを確認しつつドアを少しずつ開く、そして頭一つ入るくらいまで開くと、今度は頭を教室に突っ込んで中を確認する。

「…なんだありゃ？」

正面の方を確認すると、教卓の上で何かが真っ赤に光っていた。

機械的、電気的な光ではないと何となく思った、どちらかといえば、夕日のような、炎のような、自然な感じで、しかしそのどちらよりも紅い。

今まで経験したことのないその感覚に、俺はその光がなんなのか、確かめたくなった。

ゆっくりと美術室の中に入り、光源へ近づく。

一步、また一步と光に向かって歩を進めるにつれ、経験したことがない筈なのに、何故か懐かしい…デジャヴのような感覚が、内側からじわり、じわりと俺の体を満たしてゆく。

そしてついに光源が俺の手の届く距離まで迫った。
俺はあまりに強い光に眉を顰めた。

目の前で煌々と光る光源は、玉のような、はたまた光そのもの
のような、物体のような、その実虚像のような、可笑しさと不思議さ
を孕んで、俺の視界を赤一色に染め上げていた。

勿論、ここまで来たらそれが何なのか確かめたくなるのが、人間
としての知的好奇心である。

少しずつ、手を伸ばす。ドクン、ドクンと血液が脈を打つのを感
じる。

そして俺の指が、光に触れた瞬間だった。

視界が…暗転した。

(…んで、気付くところにおいて、状況を飲み込もうとしているうち
にいつの間にか刃物を突きつけられていたんだよなあ…。)

結局、間違っていたのは何処だ？光に触れたこと？美術室の中
に入って行っっちゃったこと？それとも覗いたあたりから？いや、赤い
光を見つけちゃったことか？

こうして考えると、全てが間違いだった気がする。居眠りも、寝
過ごしたことも、大野との会話でさえ…。

『好奇心猫をも殺す』、そんな言葉が頭を過った。成程、言いえ
て妙である。

たった一つの好奇心が今、俺の命を脅かしているのだから、皮肉
なものだ。

「…さて、最近この辺の村に腕のいい傭兵が付いたって話だ。邪
魔が入る前に、さっさと始末しちまうか。」

ああ、俺は死ぬんだな、父さん、母さん、ごめんよ、親不孝な息
子を許してくれ。

愛海、怖い映画を見た夜でも一人で寝られるようになれよ…。

大野、団体戦出られなくてごめん…。

死を覚悟した瞬間に、沢山の人の顔が浮かんでは沈み、浮かんでは沈み…まるで走馬灯のように俺の中を駆け巡る。

男の剣が振り上げられる、薄暗い森の中でも、天に向かって突き上げられた剣の僅かな反射光は、俺の『最後』を飾るのには十分すぎるくらいに、静かに、冷たくその存在を主張していた。

剣が一瞬強く光ると、ブン！という風を切る音と共に視界から消える、剣が降り下ろされたのだと気付いた、次の瞬間には俺は死人か…そう覚悟した時だった。

ギイイイイン！

金属同士がぶつかる音、その鼓膜を激しく揺さぶる音に、俺ははっと顔を上げた、目の気付くと視界は真っ暗だった。ここが死の世界か？と一瞬思ったが、それが間違いだということにはすぐに気が付いた。俺の視界を真っ暗にしていたのは、俺の前に突如出現した漆黒の布だった、急に強く吹いてきた風に、その漆黒の布が大きくはためくと、それは誰かが羽織ったマントだということに気が付いた。

誰かが、俺と悪役男の間に割って入っていた。

「大丈夫か？少年。」

若い男性のものと思われる低い声に、俺は、（ああ、助かったんだ）と感じた、そう感じられるほど、その人の声は俺の心に安堵をもたらした。

「お…お前は？ライズ・レネキス？」

悪役男の表情が一変する。

成程、この男性はらいずれねきすと言うらしい、その人は俺に背を向け、悪役男と対峙していたので顔までは見えなかったが、赤い何かの模様が小さく入った漆黒のマントを纏い、まるで騎士のような、これまた漆黒の鎧、黒く、襟足の長い髪…何から何まで黒いその人の背中、むしろ俺の心に光を射していた。

唯一銀色に輝く剣には、マントに入っているものと同じアルファベットの「E」を崩したような模様が入っていた。

「最近、この近辺で追剥をする輩が多いと聞き、見回っていたら成程、見たままに悪事を働きそうな恰好をしている」

「な…何故お前がここにいる？」

悪役男とその取り巻きは、目に見える程に動揺していた。名前を知っているところを見る限り、この人は有名人なのだろうか？

「頭あ…こ…コイツ、あの、ライズ・レネキスですかい？あの…騎士団の…。」

「クソ！騎士団を辞めて、まさか傭兵に成り下がっていたとは！」
「御託はいい、この辺一帯を根城にしている賊というのは貴様らだな？」

ライズと呼ばれたその男が、悪役男に剣を突きつけると、悪役男は大きく後ずさる。

「畜生…相手が悪すぎる。まさかこんな大物が出てくるとはな…ずらかるぞ！勝ち目がねえ！」

悪役男たちは、途端に背を向け走り出す、ライズと呼ばれた男は追おうともせず、剣を腰の鞘に納めた。

「あ…あの。」

「怪我は無いか？」

ライズがぐるりとこちらを向く、その時初めてその男の顔が見えた。端正な顔立ちに、長い前髪、切れ長の目に、男性にしては長い睫、そして、透き通ったダークブルーの瞳…はつきり言って、男の俺が見ても悔しいほどにイケメンである。

「あ…あの、ありがとうございます。」

おれはまず、その命の恩人に礼を言う。

「うむ、大丈夫そうだな、無事で何よりだ。」

改めて、その男性を見てみる、身長は…180センチほどだろうか、筋肉のバランスもよく、まるでメンズファッション誌のモデルのようだった。

「君の名前は？」

「奈織樹…中佐都、奈織樹。」

「ナオキか：俺の名前はライズ・レネキス。フリーの傭兵だ。」

ライズさんが手を差し出してくる。そういえば俺は腰を抜かして尻餅をついていたんだ。なんだか恥ずかしくなったが、素直にその手を取り、立ち上がるのを手伝ってもらおう。

「それにしても変わった名だな、服装も見たことがない、何処から来たんだ？」

「に：日本。」

「ニホン？聞いたことがないな。名乗り方から察するに、苗字が先に来るのだろう？」

「は、はい。」

「うむ：アズール周辺の文化を組む国か何か？」

アズール？何だろうそれは。なにやら分からないことだらけなので、この際だからとライズさんにいろいろ尋ねてみることにした。

「あの：ここは何処なんですか？」

「エルバイラ王国の東の果てだ。君はアズールの方から来たのか？」

「エルバイラ：アズール：何ですかそれ？」

「エルバイラを知らないのか？アズールも？」

「はい：。」

「ふむ：よほど閉鎖的な国の者なのか：単に世間知らずなのか：記憶喪失なのかもしれないな。」

ライズさんは考え込んでしまった。

「あ、あの！記憶に問題はないと思います：ただ：」

「ただ？」

「あの、俺が住んでいた場所とは明らかに異なっている：というか、俺の記憶する俺の住んでいた世界とは違う気がする：：というか：。」

「記憶する世界とは違う？」

「はい：何て言うか：まるで、お話の世界に迷い込んだ感じですが、感覚的には。」

「記憶する世界とは異なる世界…異世界…まさか？」

ライズさんは何かピンと来たようだった。

「あの、何か分かったんですか？」

「まさか…いやしかしそれしか考えられん」

「ライズさん？」

少し考え込むような間を置いてから、ライズさんは口を開いた。

「…少し、話がしたい、俺が借りている家に来てはくれないか？

ここでは何だしな。」

ライズは急に真面目な顔で言う。

「ナオキ、君のことについて、助言できるかもしれない。」

俺は頷いて、素直にその申し出に応じた。応じるしかなかった。

またさっきのような目に遭うのは御免だったし、なにより自分の置かれている状況について少しでも手がかりが欲しかったからだ。

「よし、ここからすぐ西に村がある、そこまで行こう。」

ライズさんが歩き出す、俺はとりあえず、その背中を追うしかなかった…西って言われても、どっちがどの方向だか分らなかったからだ。

「成程、つまりその光によって、この世界に来てしまった可能性が高いと？」

「そうです。」

俺は、頬の傷の手当を受けてから、ライズさんに事の顛末を全て伝えたと、ライズさんは難しそうな顔をする。

「やはりあの伝承は正しかったのか、そうすると、厄介なことになったな…。」

顎に手を当て、何かを考え込むようにライズさんが呟く。

「あの…伝承って？」

「うむ、では俺から、『心当たり』と『伝承』について説明しよう。まずは『伝承』についてだ。」

ライズさんは何かを思い出すように目を閉じ、口を紡ぐ。俺は黙ってその様子を見ていた。

そして少し経った後、ライズさんがゆっくりと口を開いた。

「其の世界に七つの聖なる光あり、彼の者は勇気を、彼の者は力を、彼の者は知恵を、彼の者は愛を、彼の者は平和を、彼の者は勝利を、そして彼の者は命を、その光宿いし刃にて賜らん、光纏いし異世界からの使者来る時、対をなす七つの邪悪なる闇が世を覆い、世の人々に混乱と不幸を呼ぶであろう。光纏いし者と闇纏いし者、或いは世を救わんと、或いは世を手中に収めんと争い……ここまでしかわからん。伝承は王都にある大教会の地下にある石板に刻まれているものだ。ここから先は石板が崩れていて、今となっては誰にも分からない。」

ライズさんが重苦しい雰囲気と言う。

今の石板の情報を読み解くに、7つの光を持った者たちが、対をなす7つの闇をもった奴らと戦う……ってことか、しかし重要なのはそこではなかった。流石の俺でもピンときた部分はあった。

「つまり、異世界からの使者ってというのが……俺である可能性がある、って事ですか？」

「ほぼ間違いないだろう、まだ眠っているようだが、君の中には、光を纏いし刃があるはずだ」

「分かるんですか？」

「いや……何となくだな。」

急に言葉を濁したライズさんに、俺は多少の違和感を覚えた。

「もしこの伝承が本当で、ナオキが異世界からの使者だとすると……これはもう俺一人にどうこうできる問題ではないな。」

「そ……それじゃあどうすれば？」

お手上げだと言われた気がして、俺が慌ててライズさんに聞くと、ライズさんからは以外にもすぐに答えが返ってきた。

「王都に……陛下にお伺いを立ててみるか。」

すぐに結論を出した割には、ライズさんの表情は晴れなかった。

むしろ先ほどよりも苦い表情をしている。

「できれば…もう二度とあそこには行きたくなかったのだが。」
ライズさんが何かを言った気がしたが、小声すぎて俺にはよく聞こえなかった。

「あの…王都ってどこにあるんですか？」

王都、と言われても場所が分からない、俺はこの世界では現在方向すら危ういほどに地理が理解できていないからだ。だからこそ、せめて少しでも多くの、この世界の情報を掴んでおきたかった。

「王都エルバイラ。ここから西へ一週間ほど歩いたところにある、このエルバイラ王国の首都、国王陛下がおられるエルバイラ城や、この国の国教であるエーラ教の総本山、エルバイラ大聖堂などがあるこの国一の大きさを誇る城下町だ」

「成程、で…その国王様にお伺いを立てるわけですか。」

「そうせざるを得んだろうな…。」

なんだか王都の話をするライズさんはどうも齒切れが悪い、何か王都でやらかして逃亡中の身…とかなのだろうか。

「兎に角、国の一大事になるやもしれん、明日には立とう、早い方がいいからな。今日はもう食事にして寝よう。明日の朝早く、ここを出発するんだ。」

「わかりました。」

明日…か、急な話になったが、どうやら俺はこの国の王様と会う必要があるらしい。なんだか色んなことが起きすぎて、何処から考えたらいいか全く見当も付かなかった…。

とりあえず、今日はゆっくり休ませてもらおう、どうやら明日からは歩きづめになるらしいからな。考えるだけなら歩きながらだつてできる。今は明日からの事だけ考えていよう。

その日はライズさんに食事をご馳走になり、早々と就寝した。一刻も早く、元の世界に帰らねば…その日寝付くまでずっとそのことを考えていた。

「はあ…はあ…、ライズさん、王都にはまだ着かないんですかあ？」

一日目、俺は早くもギブアップ寸前だった。

「音を上げるのが早すぎだろう、まだ5時間程しか歩いてないぞ。」

ライズさんが「やれやれ」といった顔で俺を覗き込んでくる。

「まだ全体の十分の一も来ていないんだ、そんなんでこれからどうする。」

「ふええ？まだそんなにあるんですかあ…。」

俺は疲労とショックでその場にへたり込む。

「仕方ない…一度休憩を取ろう、急ぎの用事…といえば急ぎの用事だが、まあ慌てることもないだろう。」

ライズさんは、近くの岩場を指さし、「あそこで休憩にしよう」と俺を促した。

岩場まで来ると、俺はそこにどっかりと腰を下ろした。

ここまで何も考えずに、ただひたすら荒野を歩いてきた足はすでにパンパンに浮腫んでいた。

（歩きながらも考え事はできる…そう思っていた時期が俺にもありました。）

実際のところ、考え事をする余裕などなかった、ライズさんと俺とは、歩く速度が全然違う、俺は早歩きに近い速度で、ライズさんについていくのがやっとだった。

（父さんと母さん…それに愛海、どうしてるかな…。）

…ふと、家族のことが心配になった、当然だ。昼間に考えていたことが現実として俺に降りかかってしまったのだ…神隠しのいきなり別世界に飛ばされる。

（流石に心配してるよなあ…。）

もしかしたら、もう搜索願とかで出るかもしれない。そう考えると、急に胸が締め付けられた。俺の安否を心配する家族の気持ち

思うと、こんなところで立ち止まっているわけにはいかない…少しでも早くこの世界から元の世界に帰れるよう…まずは一步を踏み出そう、そうすることで、不安を消し去りたかったのかもしれない。

「ライズさん、そろそろ行きましょう。」

「…先ほどと顔が違うな、何か思うことがあったのか？」

「…今は、立ち止まっている場合じゃないと…。」

「ふむ…まあいいだろう。行こう、まだまだ先は長いぞ？」

「はい！」

それから俺たちは歩き始めた、もう浮腫みも、足の裏にできた肉刺も気にならなかった。ただ前に進もう、そんながむしゃらさだけが俺を突き動かしていた。

そして…瞬く間に5日が過ぎた。

五日目の夜。俺とライズさんは、もう王都の近くまで来ていた。

「ナオト、お前が頑張ったお蔭だ、一日早く着きそうだぞ。」

「はい、今は…立ち止まっている場合じゃないので。」

「…やはり思うことがあったようだな。しかし焦りは禁物だ、どちらにしろ今からの時間では王都へは入れない、日没と共に王都への門は閉まってしまっからな、今日はもう休んで、明日の朝王都入りしよう。」

「はい。」

その日は王都近くに野宿することになった。

その日の夜の事である、王都近くの岩場で、俺とライズさんは野宿していた。ライズさんはもう寝てしまって、俺は寝付けずになんとなく空を見ていた。

…俺の住んでいた街じゃ絶対に拝めないような…一面の星屑が、まるで永遠に続く絵画のように、どこまでも…どこまでも…その夜空を埋め尽くしていた。

気になるのは、家族のことである。特に、妹…愛海のこと気が

かかっていた。

「愛海……。」

俺と愛海は実の兄妹だが…両親とは、血は繋がっていない。俺と愛海は、小さいころに実の両親と死別し、遠い親戚筋にあたる現在の両親に引き取られた。唯一の肉親だからか、愛海は昔から俺にべつたりだった。小さいころは何をするにも一緒に、最近でこそだいぶ落ち着いてはいるが、時折異常なまでにベタベタしてくることがあった。これも実の両親がいないことから来るものだと俺もなんとなくは解っていたので、愛海の事はいつでも気にしているのだが。

…だからこそ、急に俺が居なくなってしまったことに、愛海が傷ついていないか心配だった。

「…いよ！」

「…めて…ださい！」

誰かの…話し声？

何となく、気になった。

俺はライズさんを起こさないように、そっと寢床を出て、声のした方へ近づいてみる。

…岩場の向こうに人影が見えたが、夜遅い上に周りに明かりが無いせいか、暗くてよく見えなかった。

しかし、多少近づいたせいか、話し声は何とか聞き取れる程度の距離を取ることができた。

「いい加減にして下さい！！！」

「いいじゃねえか！ちよつとお話するだけだつて！」

…どうやらもめ事らしい、男女の言い争うような声が聞こえてくる。

「離してください！軍警察を呼びますよ？」

「この時間に軍警察が来るわけねえだろ！」

「構わねえ！連れて行け！」

どうやら複数の男が、一人の少女を連れ去ろうとしていた所だったらしい、一気に俺の中に緊張が走った。

考えている余裕など無かった、ただ俺は無意識のうちに飛び出していた。

「や…やめろお前ら！」

「あん？」

強面の男数人がこちらを睨んでくる、少女は、そのうちの一人に腕を掴まれていた。

「そ…その子から離れる！」

声も膝も震えていた。正直言うと、めちゃくちゃ怖い。

確かに俺は武道の経験者だ、しかし丸腰、相手は明らかに人を殺したことがあるような目をしていて、しかも手には幅広の曲剣が握られている…勝ち目がないことは明らかだ…だが、時間稼ぎくらいはできるはずだ。

「うわあああああああ！」

俺は雄叫びを上げて走り出した…そして。

ドンッ

少女の腕を掴んでいた男に突進した。

「うわっ！」

男は受け身を取るために、とっさに少女の手を放した。

（チャンスだ！）

「こっちへ！」

俺は少女の手を掴むと、その場から一目散に逃げ出した、少し恰好悪いとも思ったが、今の俺にはこれくらいしかできなかった。

「ガキを追え！逃がすな！」

俺は少女の手を引いて、追いつかれまいと必死で逃げた、しかし周りには隠れる場所も無く、追いつかれるのは時間の問題だった。

「はあ…はあ…」

（この子の体力も、そう長くは持たないだろう。）

しばらく逃げていると、ついに少女が力尽きたのか、その場に膝をついてしまった。

「わ…私の事はいいですから…あなただけでも…逃げて…」

「そんな！」

「捕まえたぞ！ガキども！」

連中の一人が俺たちに追いついてきた、他の男たちも続々集まり、取り囲まれてしまった。

男の一人が、少女を捕まえようと腕を伸ばしたその時だった。

少女を捉えようとしたその腕の肘から先が…『消えた』。

「ひゃっ？」

男が驚きに声を上げると、男の腕から血が噴き出した。

「大丈夫ですか？」

声が出た方を見上げると、月明かりを背に、若い女性が、剣を持って立っていた。

長い黒髪を靡かせ、お話の中のの騎士を思わせるような服装に、胸部にプレートアーマー、マントと、こちらも騎士を彷彿とさせるような服装でありながら、小柄で、短いスカートからすらりと伸びる足は女性的だった。

には、見覚えのあるEを崩したような紋章が入っていた。

「ぎゃあああああ！うでがあああ…うでがあああああああ！」

男はどうやら腕を切り落とされたらしい、苦痛に地面を転げまわっている。

「王国軍だ！未成年者略取の現行犯で拘束する！ひっ捕らえる！」

女性がそう言うと、仲間だろうか、同じような恰好をした屈強な男たちが、次々に少女を襲った男たちを捕えていく。

「怪我はありませんか？」

女性が訪ねてきたので、俺が首を縦に振って肯定すると。

「そう…よかった。」

その瞳は優しげで、先ほど男の腕を問答無用で切り捨てた冷徹さはそこには無く、むしろ聖母のような自愛に満ちていた。

「あの…あなたは？」

「自己紹介が遅れましたね、私はサクヤ・エルアインス…王国軍騎士隊所属の軍人です。」

「軍人…。」

驚いた、歳も俺と大差ない感じなのに…この女性が軍人なのか。

「しかし…この辺りも物騒になりましたね…彼が居なくなってから、軍内部の統率が…少しずつ乱れています。そのせいで、夜間の王都外警備がおろそかになっているのでしよう。」

「彼…？」

「彼というのは…。」

「隊長！護送の準備、整いました。」

「…わかりました。あなたたちは王都に？良かったら一緒にいかがですか？」

サクヤの話が、部下であるう人の報告によって中断された。まあ、その時は特に気にしても居なかつたので、そのまま話を続ける。

「俺は…連れが居るので。それよりも…。」

俺は彼女の方を見た。

「あの、私は連れて行って下さい！薬草を取りに出いたら遅くなってしまう…そのまま王都の閉門時間を過ぎてしまつて入れなくなつてしまつたんです。」

「なるほど、それで野党に…。」

「はい。」

「わかりました、王都内までお送りしましょう。」

ふいに、少女がこちらを振り返つた。

「あの…。」

その時、初めてその少女をまじまじと見た。

赤のチェック模様のエプロンドレス、同じ色のバンダナからは、栗色のお下げが覗いており、碧色の大きな瞳が印象的だった。

「あの…ありがとうございます！」

「今度は気を付けてね。」

「はい！このお礼は必ず！」

そう言つて少女は馬車に乗り込んだ。

「帰還します！」

サクヤがそう言うと、馬車は王都目指して走って行った。

「…あ。」

馬車を見送ってから、俺は重要なことに気が付いた。

「あの子の名前：聞いてないや。」

まあいいか、あの子とはまた会える気がする…なんとなくだけで。

ライズさんのところに戻ると、ライズさんは起きていて、何処に行っていたのかと問い詰められたが：俺はとりあえず本当の事は言わないでおくことにした。言つと怒られそうな気がしたからだ。

「本当に何もなかったんだな？」

「ほ…本当ですって！」

上手くごまかせているかはわからないが、眠れないから散歩に行っていた…ということにしていた。

「…まあいいだろう、ここいらは天下の王都の近くとはいえ、最近では物騒だと聞く、また野党に襲われないとも限らない…気をつける。」

「わかりました！」

俺はそう言つて急いで床に就く。

「…。」

ライズさんも寢床に戻る。何も言わなかったが、アレは多分色々感付かれてるな…この人には一生勝てない…ような気さえた。

翌日早朝、俺とライズさんは、開門と同時に王都に入った。

早朝だというのに、門を入れてすぐの市場は既に人で賑わっていた。

「ここが王都ですか、広いですね…。」

「…もう、二度と来まいと思っていたんだがな…。」

「ライズさん？」

「…気にするな、まずは王への謁見許可を取らねばならんな。」

「謁見許可ですか？」

「ああ、通常、謁見する旨と理由を書いた書状を王城宛に郵送する。今回もその方法を執ろう、最悪一週間程度かかるが…いきなり行くよりは可能性が高い。」

「なるほど…。」

「まずは、その間滞在する宿を探そう…できれば中心街からはなれていた方がいいな。」

「何ですか？」

「ああ…無用な混乱を招くことに…。」

その時だった、証人らしき若い男がライズさんの肩にぶつかつた。

「…すまない、大丈夫か？」

「ああ…こつちこそよそ見してて…アンタ、ライズ・レネキス様じゃないか？」

「…しまった。」

その声を聞いた待ち人たちがぞろぞろと集まってくる。

「…本当だ！ライズ様だ！」

「ライズ様が帰ってきたのか？」

あつというまにライズさんと俺は囲まれてしまった。

「ライズさん…これってどういう…。」

「…。」

ライズさんは何も言わなかった。

「どけどけ！ライズが来ているというのは本当なのか？」

人ごみの中から一際大きな声が聞こえてきた。

「一番厄介な奴が現れたな。」

ライズさんがそう言うと、人ごみの中から声のした方を振り返る。

昨日のサクヤにそっくりな服を着た若い男が、人ごみを掻き分けてこちらに向かってきた。

「…ライズ。」

ライズさんと同じくらい…180センチくらいの身長、綺麗な金髪は短めにカットされ軽い癖っ毛になっていた、アーマープレート付の服を着たその男は、そのサファイアを磨き上げたかのような碧眼で、まっすぐライズさんを見ていた。

「…二年ぶりか、シオン。」

「ライズ、陛下が会いたがっている…それに、姫様も。」

「…。」

ライズさんの敵か？とも思ったが、二人の雰囲気を見るに、どうやらそうではないらしい…どちらかといえば…そう、親友と…いや、生き別れの兄弟と再会したような…そんな雰囲気だった。

「皆がお前の帰還を信じて待っていた…エルバイラ軍騎士隊、元老騎士…ライズ・レネキス！」

「元老…騎士？」

一瞬、シオンと呼ばれた男性が行った言葉の意味が解らなかった…ライズさんが…ライズさんが…騎士？

「『元』が抜けているぞ、シオン。」

そついうと、ライズさんは全てを諦めたかのような顔で苦笑いをした。

元老騎士

思えば、最初にこの世界に来た時に、野党の一人が言ってたっけ。

『頭あ…こ…コイツ、あの、ライズ・レネキスですかい？あの…騎士団の…』

そう、あのサクヤって人と会ったときに思い出すべきだったのだ…騎士という単語で。

俺とライズさんは今、エルバイラ城内にある客室に通されていた。ライズさんは部屋の隅に立つて、ずっと何かを考え込むように窓の外を眺めていた。

俺はというと、客室とは思えないほど豪華な装飾のフカフカソファアの感触を堪能していた、緊張感が無いだけかもしれないけど。

「騎士…か」

そういえば俺の、ライズさんに対する最初の印象がそれだった。

騎士…本来の意味は読んで字の如く、馬なんかに騎乗して戦う戦士のことだが、俺の住んでいた国では、主に仕え、忠誠を誓い身を挺し、時には命を懸けて主を守る…そんな『お話』が多かったせい、所謂『騎士道』を重んじるイメージが定着してしまっていた。

しかし、少なくともこの世界では俺の持つイメージはあながち間違いない…。二人を見ていると、そんな気がした。

しばらくすると、コンコンとドアが控えめにノックされる音が聞こえてくる。

「失礼します」

聞き覚えのある澄んだ女性の声。

ドアが開かれ、入ってきたのは…昨夜、俺とあの子を助けてくれたサクヤさんだった。（決して駄洒落ではない）

「あら…あなたは」

「昨日は、ありがとうございました」

サクヤさんの姿を認めてから俺は一礼する。

「成程、連れ…というのはライズ様のことだったんですね」
サクヤさんが納得したように言う。

「ナオキ、サクヤと顔見知りなのか？」

俺は昨夜の経緯をライズさんに話した。

「全く…そんなことだろうと思ったよ」

ライズさんはやれやれといった感じで首を左右に振った。

「ナオキを責めないで下さい、彼の勇気のおかげで、あの少女は救われたんです」

サクヤさんが間に入って俺をかばってくれた。

「しかしだな…」

「それに…こうなった責任は、ライズ様にもあると思われませう。」

「…なんだって？」

ライズさんはサクヤさんに厳しい眼差しを向ける、しかしサクヤさんは全く臆することなく続けた。

「今、我がエルバイラ軍の統率は乱れつつあります。最近では規律を乱し、命令を全うしない者も出てくる始末…最近、王都の夜間外周警備が疎かなのも、その一つでしょう」

「…何が言いたい？」

「こうした軍の乱れは…ライズ様、貴方が居なくなっただけからの事なんです」

「……」

「軍は、貴方という大きなカリスマを失って、どんどん士気が下がっています。シオン様とアル様だけでは…この大所帯を纏めるのに限界があるのです」

「結局何が言いたい、サクヤ」

サクヤさんはライズさんの目を真っ直ぐ見て言った。

「騎士隊に復帰して下さい。貴方には、その義務があるはずですよ」
その眼差しに気圧されたのか、ライズさんは目を逸らした。そして…。

「…それは、できない。お前も知っている筈だ、俺は騎士として

失格』なんだ」

「…まだ、逃げるおつもりなのですね？」

「…何だと？」

サクヤさんは、明らかにライズさんの逆鱗に触れていた。

「貴方はあの事件を出しに、姫様から逃げているだけです！」

「サクヤ…お前…」

ライズさんが剣の柄に手を掛けた、その時だった。

「二人とも、よさないか！」

部屋に入ってきたのは、市場で俺たちを見つけ、この城に連れてきた青年。

金髪碧眼で、サクヤさんと似た格好をしたシオンという男性だった。

「シオン様…」

「サクヤ、勝手な真似はするな。ライズ、安い挑発に乗るなど、お前らしくもない」

「…」

ライズさんは黙って剣から手を引いた。

「…陛下がお会いになる。二人とも、ついて来たまえ」

「済まなかったな、うちの部下が見苦しい真似を…」

謁見の間に案内されている途中、シオンさんが不意に話しかけてきた。

「サクヤさんは、貴方の部下なんですか？」

「サクヤは直系の部下だが…この軍の人間は全て、基本的には俺の部下…ということになるか」

「…ということ？」

「そういえば…自己紹介がまだだったな。私の名前はシオン・エリクール。エルバイラ軍騎士隊長にして、エルバイラ軍総司令官だ」

「そっ…総司令官？」

サクヤさんの件やライズさんの件よりもびっくりした、歳はまだ

二十代半ばから後半といった感じなのに…一国の軍隊の総司令官だなんて。

「まあ、騎士隊と軍隊にはそれぞれ別に司令官がおかれていてな。私が指揮するのは基本的には騎士隊だけだ」

「あの…その軍隊と騎士隊って、どう違うんですか？」

俺はここぞとばかりに気になっていた疑問をぶつけた。

「ふふ…いい質問だ。ではまず軍隊についてだ。軍隊とはその名の通り、この国の保有する軍事力…エルバイラ軍の戦闘部隊だ。戦闘部隊と言っても、警備、警察、警護、護衛…国内の様々な任務に就く、国の防衛機関だ。」

「防衛機関…ですか」

「任務はむしろそちらが多い、我がエルバイラ王国は侵略戦争はしないからな、我が国は広大な土地、豊富な資源、そして資金源、全てが揃っている。それ故に侵略を目論む国家もまた多い…其れ故の軍事力だ」

「では、騎士隊…というのは？」

「騎士隊は、軍の中でもとりわけ戦闘能力の高い者を抜擢し…王族、貴族、教会の高官、大商人など、国家にとって重要な人物を護衛、守護すること目的に組織された特殊部隊だ。通称『騎士団』…国民の中にはそう呼ぶ者の方が多い。無論、戦争になれば我々騎士隊も戦闘には参加するがな」

「それじゃあ、シオンさんやサクヤさんも？」

「ああ、私は騎士隊の隊長だ、私がお守りするのは、エルバイラ国王陛下、シウラウス・ウル・エルバイラ十二世、そのお方だ。サクヤは私の補助騎士だ」

「補助騎士？」

「ああ、私のように、直接主に仕えるのが騎士、騎士に仕え、補助するのが補助騎士だ、騎士も補助騎士も、国王陛下から直々に『シユバリエ』の勲章をいただいている。この勲章は、主をお守りする代わりに、貴族並みの特権が許される…というものだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2681t/>

エルバイラ物語

2011年8月4日05時32分発行